

## 第6回車座会議 議事概要

- 1 日 時：令和6年9月5日（木）10：45～11：45
- 2 会 場：シャレオ中央広場
- 3 登壇者：湯崎広島県知事、石田 知美さん（有識者・ファイナンシャルプランナー）、大下 幸恵さん（有識者・公認心理師）、秋山 陽子さん（子育て経験者）、漆畑 明子さん（子育て層）、漆畑 文雄さん（子育て層）、橘高 京子さん（子供を持たない層）、樋口 謹行さん（子育て層）、三田村 知里さん（子育て経験者）、高橋 美智子さん（子育て層）、徳永 真紀さん（司会・フリーアナウンサー）

### 4 概 要

#### 【オープニング】

（出席者紹介）

（広島県の少子化の現状と課題等について、広島県担当者から説明）

【論点1：子供を持つ・持たないは個人の自由な意思決定によるものですが、行政が少子化対策を行う必要があると思いますか？必要だと思う場合、どのような施策が必要だと思いますか？】

徳 永： 論点について、フリップに書いていただいた。全員対策を行う必要があるとのことだが、内容はそれぞれ違うので、話を伺っていききたい。

高 橋： （「保育料・医療費・食事支援 経済面での支援」とフリップに記載）

1点目の保育料について、先ほど持ちたい方が子供を持てるために、どうすればいいかということで、お金の面という話があった。第2子が、自治体によって違うかもしれないが、私がかつて住んでいた大阪府の市では、無料で、もう1人持とうというきっかけになると思う。3歳になるまで半額でも、相当な金額かかるので、無償になると、もう1人持とうかなと思う人が増えてくると考えている。

2つ目の医療費については、広島県の自治体によって違うとは思いますが、乳幼児医療費の所得制限の撤廃をしていくのはどうか。前回の車座会議の内容も見たが、同様の論点になり、しない方がいいという方が多かったが、私自身の意見としては、所得に関係なく、こういう制度で補助してもらえることで、もう1人（子供を）持つきっかけになると思う。子供が小さいうちは、病院にたくさんかかるし、数百円で見ただけになると、負担にはなるので、所得制限の撤廃をぜひ進めていただけないかなと思う。

最後の食費支援については、先ほど（の調査で）も所得の増を皆さん求められていたので、その所得増にあたるような、これだけ物価が上がっている中で、これも、大阪との比較で申し訳ないが、年に何回かお米を買える券を1人当たり何千円という形で補助してもらえる支援があり、すごく助かった。周りの友達も、助かると言っており、そのような食料支援という形で、所得増になるようなサポートをしていただければなと考えて書かせていただきました。

徳 永： お米のことについて、お米にしか使えないものか？

高 橋： お米以外の産品も選べるが、お米を選ぶ場合が多い。

樋 口： 7歳と5歳の娘がいるが、子供がいるのはすごく楽しい。高橋さんのお話にも通ずるところがあるが、お金に関する不安で、心の余裕がなくなると思う。現状もそうだし、将来どのぐらいかかるかわからないから、今貯めておくであるとか、外食を減らそう、どこかに行くのを減らそうというように、内向きになり、心の余裕がなくなることはあると思う。

高橋さんが結構細かな部分の話をしていたので、少し抽象的なところから言うと、極論子育てにはお金掛からないというぐらいまで（制度が整備）できると、よいと思う。一方、短期的にお金を投入すればいいかということそれだけではなく、循環が生まれることが、みんなが納得する上では必要。教育費に公費を投じることで、子供たちがいろんな職業を自分で見つけられるようになり、経済が良くなり、税金が増えるというような、そういう循環を描いていくことが必要。

徳 永： 未来をみんなで共有するみたいなイメージか。

樋 口： マイナスをプラスにしていくということまで見せられると、それはいいことだという気概がみんなの中で生まれてくるのではないかと思っている。

徳 永： 経済の話も出たが、石田さんはどうか？

石 田： 循環を生むという考え方が素晴らしい考え方だと思う。お金に関してこれからどれだけかかるか不安だという相談はよくある。その中で、大学まで行くと1,000万円、塾や習い事などその他諸々通うとさらにかかるかと安易に（相談者に対して）答えてしまうことがあり、反省しないといけないと感じた。例えば、奨学金の制度もいろいろあり、そういったものも受けつつ、節約できる部分は節約することでやっていけば、そこまでではないが、数字が独り歩きしている部分に関しては反省しないといけないと感じた。

所得制限について、これも相談は多く、出産をしてすぐに少しでも早く働きたい方もいるが、働いてしまうと、保育料が多くかかるとか、だから抑えて働こうかという方もいるので、なかなか難しいところ。

徳 永： ありがとうございます。石田さんから見て気になるポイントは何かあるか。

石 田： 漆畑（明）さんの家事サポートというのは具体的に何か。

漆(明)： 出産後自身の体験からとなるが、両親がおらず、自宅で過ごす中で、家事もしないといけない。初めての子育てで、育児はこうでないとならないというような呪縛に囚われており、心の疲れがあった。そういう経験から、赤ちゃんとゆっくり過ごせる時間が産後はあった方がいいなと思い、家事全般をサポートできるサービスが拡大したらうれしい。また、1人目のときは、主人と2人なので、食事の面は主人に全部任せることはできるが、兄弟が増えていく中で、下の子供の食事の面もすごく気がかりで、お弁当を取り寄せるサービスを1ヶ月くらい使った。そういうものを知らないとか、使いにくいという方もいると思うので、こういう食事の提供のサービスが用意されていれば使いやすく、安心して利用できるかなと思う。

徳 永： 自身の体験からありがとうございます。三田村さんも精神面の部分での公費か？

三田村： 自身が産後鬱になった。その後第2子を出産する際に周りのサポートや病院の支援があった。カウンセリングを受けたりして第2子を持てた。抱えてしまう前に、行政から、専門家派遣などの相談しやすい環境づくりを提供していただけると嬉しい。私が出産した当時は、保健師の方が訪ねてくださる制度がなかったが、今はそれがあっていいな

と思うし、より良い方向に変わっていくことはいいことだと思う。そういったことが充実していくと第2子、第3子を考えていきやすくなるのではないのか。

徳 永： そこに関しての公費負担とは？

三田村： 不安を抱えている方への専門家派遣、カウンセリングをもっと身近に受けれるような公費負担があるとうれしく感じる。全額でなくても一部負担があるとうれしい。あと、病院に行ってからでも遅いわけではないが、その前の予防策として、そういった施策があるとうれしいなと個人的には思う。

徳 永： 漆畑（文）さんはいかがか。

漆(文)： 皆様が書かれてるのは、第1子を持つことや、結婚している方が、どうやって子供を新たに増やしていこうかということかと思うが、少子化を止めるのは、未婚の男女がいかにくっついて、第1子、第2子というモチベーションを作っていくかということが大事だと思う。できれば早い段階で結婚をすれば、子供が増える可能性は増える。

例えば私の親の場合、23歳で第1子を産んだので、それから3人を産みやすかったというのはあると思う。社会情勢が変わってきており、そのぐらいの年齢で産むのは難しくなっているかもしれないが、20代のうちに結婚、それから出産をしてということができれば、子供は増えていくのではないか。それを国や県でサポートしていけば、広島県で子供が増えるし、広島県で産んだら得なんだということがあれば、転出超過の話も食い止めれるのではないかと思う。

徳 永： 湯崎知事いかがか。

湯 崎： 皆さんが何らかの支援が必要だっていうところは（感じた）。先ほど御説明したアンケートの中でも出ているように、ほとんどの県民の皆さんが、支援が必要ではないかと思っただけというところがあらわれていると思う。その中で具体的に何かというところで言うと、今日は特にすごく色々あり、皆さん御自分の経験に基づいて、こういうところがあるといいなということをおっしゃっていただいている。広島県では今すごく子供が減っているが、親御さんがこのように思っているんだなと想像するところがあった。

【論点2：妊娠・出産・子育てする上での「安心感」って何だと思えますか？（経済面、精神面、身体面、社会全体の意識、など）

中でも、若い世代が経済的な安心感や将来の見通しを得るために必要なことは何だと思えますか？】

徳 永： 次の論点に入るが、秋山さんいかがか。

秋 山： 自分自身を大切にするための「みんなの実家」と書かせてもらった。これは、東京都荒川区で実際に行政が取り組んでおり、大学生や子育てを終了した方々がサポートとして入り、実家のような安心感を与えるサービスがある。私もシングルマザーになったが実家の存在がすごく大きかったし、キャリアとか生活不安とか、先ほどの家事サポートとか、いろんな不安が入りまじるのを、実家のように子供を預けて、夫婦で体も心も緩む時間もあると、心にもゆとりができ、いろんなことが循環することも考えやすくなるのではないかと思い、「みんなの実家」是非、広島でも作っていただけたらと思い書いてみた。

徳 永： では、橘高さんいかがか。

橘 高： （労働者の賃金アップと記載）

私自身、進学や習い事などやりたいことがたくさんあったが、経済的な問題で諦めたことがたくさんあり、格差がない家庭というのが理想。

徳 永： 論点1では「夢を諦めないための教育支援」と書かれていたが同様の観点か。

橘 高： 子供たちがやりたいことをできる環境があればいいなと感じる。

徳 永： 高橋さんはいかがか。

高 橋： 安心感について、お金のことはもちろんあるが、周囲のサポートが重要。第1子を産んだ直後、大阪に行き、周りのサポートが何もない中、安心感を得たのがママ友だった。広島県でも助産師など専門家の方のサポートがあると思うが、お友達を作る環境があると、困った際に頼り合えるし、なんでも相談できるので、安心感という面から大事だなと感じる。

また、プレコンセプションケアについて、県でも取り組んでいるということを知ったが、若い世代が将来の見通しを得るために必要なことということでこれを書かせてもらった。妊娠する前のケアということで、私も第2子を不妊治療を経て出産し、高齢になると子供が産みづらくなるとか、学校では教えてくれなかったと思う。知らない方はたくさんいて、前回（の車座会議で）もそういう話があったが、そういったことを学校で教えてもらえば、こういうライフプランにしていこうということを考えるきっかけになると思うので、ぜひ推進していただきたい。

徳 永： 漆畑（明）さんと樋口さんは同様の意見のようだが、漆畑（明）さんどうか。

漆(明)： 子育ては大変だという風習が世の中にあると思う。特に若い方は、経済面、精神面、身体面、全部、大変と感じていると思う。だから、リスク回避できるかどうか、大切だと思う。学生の時から、こういった論点について話ができれば、情報過多の時代でいろんなこともあると思うが、教育でしっかり伝われば、違ってくるのではないか。

徳 永： 樋口さんはいかがか。

樋 口： すごく共感するところがあり、子育てと言うと、ネガティブな声の方が入って来やすいような状況はあると思う。でも実際はすごく楽しいこともある。安心感が何なのかと考えたときに、分からないということがすごく不安を生んでいると感じており、いろんな制度がある中で、それをわかりやすく伝えることや、わかりやすい使い方を設計することは非常に重要。全然分野は違うが、110番や119番にかけるというような、みんなの共通見解として、子育てのときはこうしたらいいというのは、解決策のひとつになるのではないか。

徳 永： 漆畑（文）さん、「令和の子育て論の浸透」と書いていただいたがどうか。

漆(文)： 私たちが変わらなくてはいけないところだと思う。例えば、育児休業をされた女性が職場に復帰をされた。次に出産したいと思っていても、職場をまたすぐに休業しなくてはならないとなったら、タイミングを考えると。また休んでしまったら周りから何かを言われなかなとか。そういうことがないように、みんながすぐ休んでもいいと言えるような雰囲気みんながしていかななくてはならない。例えば共働きで、保育園で緊急で熱が出たとき、共働きだと夫側は大事な仕事しているので、妻側に行ってもらおうということになる。妻側が行くのが当たり前みたいなことが、何というか、昭和平

成の価値感だと思う。それはどちらが行ってもいいし、行ける人が行く。そういったことを啓発していく。それが妻側の働きながら、子育てすることが楽になっていくはず。男女平等だと言うのであれば、働きながらの男女平等ということもあってしかるべき。昭和平成の価値感捨て、令和がこうなんだよというところを広島県や、みんなが共感していけば、お子さんを育てやすく、産みやすくなるのではと思う。

徳 永： 大下さんいかがか。

大 下： 心理的、お金の事、教育のこと、子育てする上での安心感是人それぞれある。いろんな方の相談を受けるという立場から話をすると、安心感は、自分が話をすると誰かが聞いてくれた、気持ちを分かってくれた、というようなことが大切だと思う。小学校や小児科で、お父さんお母さんの話を聞いているが、耳を傾けて聞く、それで安心し、人にはなかなか言えないことや悩んでいること、しんどい気持ちを話される。それで、心が楽になることや、話の中で答えを見つける方もいる。ただ、安心感はこの相談の場だけで起こるのではなく、私たちが身近な人の話を聞くところで、普段から起きることだと思う。例えば子育てでしんどいときに、夫婦が会話をする。また家庭の中だけではなく、職場、友達同士でもできる。なかなか相談に行くことは、先ほどお金ということもあったが、どんな人が聞いてくれるのかなどの不安から躊躇されてる方も多い。そのため、身近な人を通して、思いを聞き、支え合うことが、社会全体で、今からできることだと思う。

ただよく聞くのは、悩んでる人の話をなかなか聞けずに、ついアドバイスをしてしまう。だから、意識しないとなかなか聞けないんだという声も聞く。当たり前のことだが、まず聞いてみようという意識を持つことが聞くことの第一歩なる。子育ての安心感のために、まずは身近な人の話を聞いてみようという意識で、実際に耳を傾けてみる。それが、ひとりひとりができることで、子育てで安心できる社会を作っていけると感じる。

徳 永： 三田村さんはいかがか。

三田村： 私自身もそうだったが、子育てしてるときに不安になると、ネガティブな情報を集めてしまいたくなるが、それを越える喜びやワクワクを感じる情報があるとうれしい。不安なとき、子育ては大変だとか、そういう情報もあると思うが、それ以上の喜びや達成感、私自身の話で恐縮だが、産後鬱になったという経験を娘が聞いて、それが助産師を目指すきっかけになった。私にとって産後鬱はネガティブなイメージだったが、それをきっかけに娘が助産師を目指してくれるというような、マイナスがプラスになるような情報を発信していくことも、大事だと個人的には思う。

徳 永： 様々な意見を聞いて湯崎知事はどうか。

湯 崎： 子育ての大変な面もあるけれども、楽しい面とかプラスの部分がたくさんあるんだよというところ、何というか、情報がこれだけ溢れている中で、人間にはリスク回避をしたいという傾向があるので、リスク情報にどうしても注目するという性質がある。情報がたくさんあると、リスク情報もたくさん出てきて、それにどうしても注目してしまうという三田村さんがおっしゃっていたようなことが起きがちではあるが、子育てしていた人の大半は、大変だけど楽しかったとか、いろんな学びがあったとおっしゃるので、そういう面を共有することが安心感に繋がるというのはある。

あとは、社会全体の雰囲気。相談や話を聞くというところ。具体的に何かあったとき、或いはなくても、誰かが支えてくれるというような、或いは他の話を聞いてくれる。実家もそういうところがあるから安心感に繋がる。今日、経済の安心の話題も出たが、そうは言っても、無い袖は振れない。

これまで4回の会議の中でも出てきてたことだが、特に相談、或いは話を聞くという面については、ネウボラを一生懸命やっている。やっているが実は広島市はやってない。広島市は、人口の4割ぐらい占めているが、広島市やっていないので、これは大きな課題。しかし、それこそ実家のような場所として使っていただきたいし、何かあれば話を聞いていただくだけでもアドバイスもできるというそういうところ。これはもっと広めていかななくてはいけない。

経済面について、今日の説明の中にもあったが、支援策含め、いろいろな御意見があり、具体的に何をやるのかというのは、お金がどれぐらいかかるかということ含め、非常に悩ましい。でも安心感に繋がる部分は必ずあるなというふうには思う。

徳 永： 今日が車座会議の最終回を迎えるということになるが、5回を通していかがか。

湯 崎： 先ほどの発言と重なる部分もあるが、みなさんいろいろな御意見があるということと、その中でも経済面はずっと（話題に）出てきたし、それから、相談できるとか、頼れる人がいるとか、或いは情報がきちんと伝わっていく（ことが重要）などが、出てきた。

なので分かりやすい施策、サービスの提供ということもしっかりとしていかなければいけないと思う。ただ、アンケートの通り、皆さん子育てを支援したいとか、そういう気持ちがあるのは、すごく嬉しいし、心強いところでもあったと思う。

（以 上）